A—63 子どもの齲歯と食生活に関する研究（第2報）
子どもの齲歯の現状と要因に関する一考察

ノートルダム清心女大家政　○宮田義昭　西塚幸吉

目的　子どもの齲歯の現状および前回の調査結果から、親が齲歯の原因と考えている幾つかの要因、すなわち母親の齲歯数、子ども自身の歯並び（以上生得的要因）、歯の手入れ開始時期、手入れ状況（以上生活習慣）、授乳期の栄養方法、離乳開始時期、おやつの与え方、食品の嫌悪度（以上栄養）と齲歯数の多寡との関係の有無について調査した。

方法　質問紙法で行ない、岡山市内79の幼稚園から任意に抽出した7園の5才児982名を対象とし、その母親に回答を依頼した。調査は昭和53年1月から同年2月にかけて行ない、摂取したおやつの種類および量は、調査期間内の日曜日を除く連続した3日間について記載してもらった。各園児の齲歯数は昭和52年4月あるいは5月実施の歯科検診結果を用いた。なお、本調査の回収枚数は826枚で回収率は84.1％であった。

結果　子どもと母親の齲歯罹患率はそれぞれ92.0％と95.6％であり　一人平均齲歯本数は7.2本と7.9本であったが、子どもと母親の齲歯数間に一定の関係は認められなかった。歯並びの良し悪しと子どもの齲歯数の多寡の間には有意の関係が認められた。歯の手入れ開始時期については齲歯発生前から手入れを始めている群では齲歯数が少ない者の比率が高く齲歯発生後に手入れを始めた群では齲歯数が多い者の比率が高かった。現在の手入れの状況との間にはこのような関係は認められなかった。授乳期の栄養方法や離乳開始時期と齲歯数との間にも一定の関係は認められなかったが、おやつの与え方（回数、摂取量）との間には高い相関があり、また食品の嫌悪度との関係は、調査した11食品群のほとんどの食品群について齲歯が多い子どもほどその嫌悪度が高い傾向が認められた。